



海外展 「日本の考古－曙光の時代」開幕

7月24日(土)、「日本の考古－曙光の時代」展が、いよいよ開幕しました。ライス・エンゲルホルン博物館(ドイツ連邦共和国マンハイム市)が会場です。ここで10月24日まで、次に会場をベルリンのマルチン・グロビウスバウ展示館に移して11月19日から来年1月31日まで開催します。その後、奈良国立博物館で帰国展を予定しています。

前日の激しい雷雨とはうってかわって、当日は好天となりました。開幕式には礼服を着こなした750名の方々が参加しました。その中に、町田章文化財研究所理事長をはじめ、田中琢前奈文研所長、都出比呂志大阪大学教授の顔がありました。

開会式では、ドイツ側からまずライス・エンゲルホルン博物館A・ヴィチョレック館長が挨拶に立ち、展示に携わった多くの方々の名前を一人一人紹介して、その労をねぎらいました。日本側からはまず在ミュンヘン清水陽一日本国総領事が、その後、長旅の疲れもあまりみせず町田理事長が奈文研の本展示会に協力した経緯とその成功を祈念する旨の挨拶をおこないました。その他にも、幾人もの方々の挨拶があったのは申すまでもありません。

開会式では、白いコスチュームを着た日本人女性



ドイツの博物館に並んだ平城宮出土品

による、日本でもめったにみることのできない前衛的な舞踊がありました。マンハイム市ではこの展示会に併行して日本映画の上映などをおこないますので、この不思議な舞踊もドイツの方々が日本文化を広く深く知ろうとする現れなのでありましょう。事実展示室の休憩所にも、折り紙や囲碁が置いてありました。

参加者はそれぞれ、367ページにおよぶ厚い展示図録をお持ちでした。その写真は、発掘遺構は調査機関の撮影によるのですが、遺物写真はすべて今回の図録のために、奈文研スタッフの牛島茂、井上直夫、杉本和樹、中村一郎が、心を込めて新しく写したものです。それらは、いずれもドイツ側の細かい条件を満たしています。また本文は、奈文研の研究者ばかりか全国の研究者が担当して日本語原稿を作り、これをW・シュタインハウスさんとG・カストロップ福井さんがドイツ語に翻訳したもので、日本考古学の最新成果の一つです。展示会が終わっても、きっといつまでも読まれるでしょう。

また展示法にも、随所に工夫が凝らされています。たとえば観客の順路と視線の位置を考慮し、遠近法的效果を利用したり、埴輪の目線を観客の目にぶつけたり、またあえて説明板をつけずに観客をじれさせたりと、これを見るのも楽しみの一つです。

遺物の集荷作業は、本年5月17日からでした。西日本を奈文研が、東日本を文化庁美術学芸課が担当しました。奈文研は全所協力して事にあたりました。なかには鹿児島県から最終集積場所の東京国立博物館までトラックで走った人もいます。その後成田から空輸し、日本とドイツが共同で点検し、展示しました。その過程で、事故があったのは残念でなりません。しかしドイツの多くの方々に見ていただき、日本文化を理解する上での一助になれば、と願っています。

(平城宮跡発掘調査部 深澤芳樹)